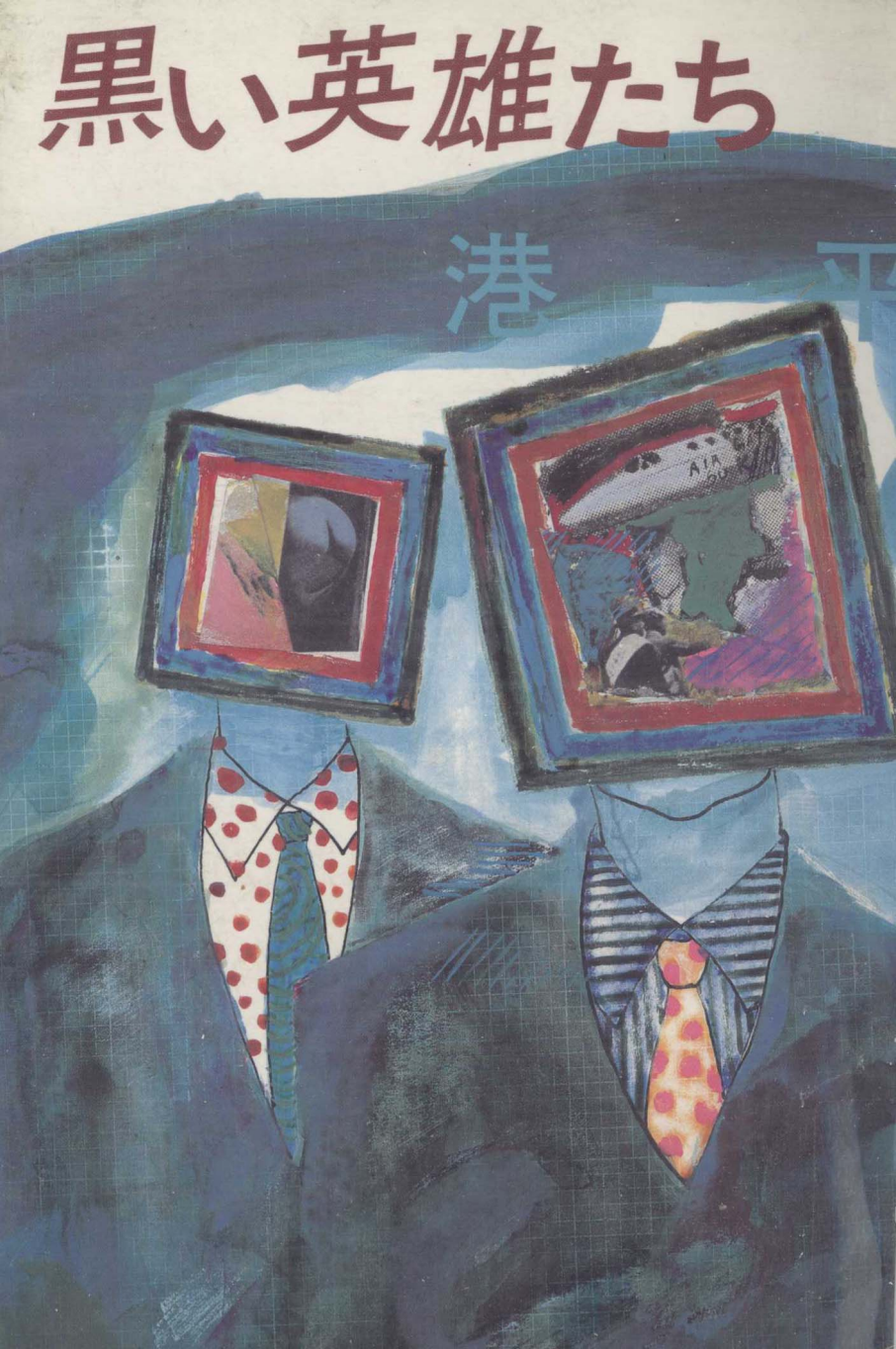
黒い英雄たち

港一平



黒い英雄たち

港一平

三一書房

港　一　平
みなと　いつ　ぺい

1928年　愛媛県に生まれる
1952年　九州大学法学部卒
現　在　日本ジャーナリスト専門学院講師，太平洋問題研究会代表
著　書　「社会科教育大系」共著（三一書房）「現代アジア革命の考察」（三一書房）「ブラックキャピタリズム」（幸洋出版）「東南アジアの政治」（翻訳）「植民地主義から共産主義へ」（翻訳）「引き裂かれた性」共著（現代評論社）「急迫する産業再編」「70年代アジアの変貌」「民族革命の展開」（ビジネス教育出版社）「セックス産業」（幸洋出版）「権力者たちの狂宴」「続権力者たちの狂宴」（幸洋出版）「半独裁――ドキュメント・朴政権の航跡」（幸洋出版）

黒い英雄たち

1981年 11 月 15 日　第1版第1刷発行

著　者　港　一　平
©1981年
発行者　菊地喜三次
印刷所　株式会社三陽社
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三　一　書　房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話03（291）3131～5番
振替東京　9－84160番
郵便番号　101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　Printed in Japan

まえがき

戦後日本経済の発展は、眼をみはるようなものがあった。日、米、欧経済摩擦は、日本経済の底力をデモンストレイトするものだろう。そこから、世界のジャーナリズムの中で日本学（ジャパノロジー）が、一瞬の流行となっているようだ。〝ジャパン、アズ、ナンバーワン〟が、その典型的な事例である。それだけではない。現在、アメリカやヨーロッパの経済使節団が、日本経済の強力さをさぐろうとして、次つぎと来日している。隣りの国の中国でも、日本経済の発展のモデルを学びとろうとしているらしい、中国経済の近代化のために。

もっとも、日本経済の強さといっても、そこには限界がある。海外のジャパノロジストたちは、航空機、コンピュータ、エレクトロニクス、油田開発機、医薬品、化学など先端技術の面で、また、全体としての平均的労働生産性の点において、日本をはるかに、ひきはなす比較優位を認識しはじめている。

いったい、日本経済はどういう方向を漂流するのか。この現実的な課題をさぐるために、本書ではあえて、戦後日本資本主義発達の裏側をさぐってみた。あるいみでは、裏側こそが本質を物語っているのかもしれない。そこに展開されているのは、あまりにも、東洋的な、ことばをかえていえば、愚

劣な人間の物語が充満している。

経済にしろ、政治にしろ、結局は、人間が主体なのである。人間を離れて政治も経済も成りたっていかない。トップ・レベルの政治と経済の関係が、戦後どうであったのか。

結論的にいえば、そこにくり広げられているドラマは、あまりにもドロドロとしている。こんな人間的風土から先端的技術は生まれるはずはないと思う。筆者の目的は、戦後日本資本主義発達史の人間劇である。が、これを物語るためには、単一の手法ではとうてい不可能だ。そこで、ドキュメントとフィクションを交錯させながら、この人間劇をえがき出してみた。

もうひとつお断わりしたいのは、本書のような戦後日本資本主義の裏面史については、筆者は、これまで何冊の単行本やいくつかのルポ式な評論を発表してきた。そのたびに感じたのは、個人＝港の無力さであった。

だからこんなちょっと読みにくいような物語りの展開を試ろみたのである。そこで思い出されるのは、現実に密着した暗黒のルポをかいたときのことである。暴力の直接のアタックこそは、受けなかったが、筆者の周辺にたちこめた無気味な空気の流れであった。〝ペンは力よりも強し〟といったのは、確か福沢諭吉の言葉である。はたしてどうなのか。

エジプトのサダト大統領は暗殺された。これでどう歴史が変わるのかどうか――それはわからない。しかしこの暗殺に代表される暴力とテロは、依然歴史の大きな潮流にも大きなインパクトを与えることは、疑うことのできない事実である。

戦後の日本史でもこの種の力が衝撃的な画期をもたらしている。浅沼稲次郎のテロ死、岸、河上に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

対する刺傷事件、河野一郎邸の焼失事件。権力の頂点にはいつもいい知れない死の影がつきまとっている。どこからこんな残忍なテロの攻撃が生れるのか。

本書は、このような暴力と陽のあたる歴史の相関をえぐり出そうとしたささやかな試みである。はたしてどこまで成功したのやら……。読者の貴重な御批判をお受けしたい、青地晨先生の親切なアドバイスに対しても、心から謝意を表したい。

本書を刊行するにあたって、三一書房の荒木さんや野崎さんの多大なご協力を得たことを感謝したい。なお、データの整理その他について、日本ジャーナリスト専門学院出身の佐々木けい子君の圧倒的な協力を得たことに謝意を表したい。

一九八一年十月十三日

港　一平

黒い英雄たち　目次

まえがき

第一章　国際ニッポン 11

――一九八×年・香港から――

ある前夜　女たち　アルメニア　危険な夜　第三者の語らい　会議が始まった　不気味なソ連　振動する釜山　戦火が走る　反日が暴走する

第二章　廃墟のなかから 36

『日本再建問題』研究会　ニュー・ディールがやってきた　小弥太の死　にがくて甘い　池田局長おそわれる　暗い昭和初年　しのびよる敗戦　一九四五年八月　幻の政権　さらば上海　黒幕は生きる　海賊　裏切　児玉誉士夫　「東京商工会議所」事件　新橋戦争　親分浮上する　反共と財閥　復活のドラマ　黒い再編　やさしい向坂さん

第三章　跳躍にむかって　104
ローカル財閥　党人派　ポーランド　植村『経団連』　佐々木次郎　激動する時代　吉田と鳩山　岸信介　六〇年安保　高度成長にむかって

第四章　奇妙な繁栄の時代　145
大来経済学　安定成長論者の登場　殺された犬　殺された女　吹原産業事件の結末　佐藤政権の成立

第五章　爛熟の時代へ　169
バンカー（銀行家）の冒険　日本型大航海時代　京葉工業地帯の裏側　三戸高校の野望　あるジャーナリストの運命　佐藤政権の政治日程　公害列島化

第六章　クレイジー、クレイジー　196
マルチ・人間＝田中角栄　土光からのアドバイス　角栄・田中がねらったもの　ピエールとシモーヌ　オーストラリアは主張する　これに与するもの　ワシントン・エレジー　ワシントンには生きた人間がいない　死体がうかぶ　土光はさった善幸さん大丈夫かね
おわりに　235

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黒い英雄たち

第一章　国際ニッポン

――一九八×年・香港から――

ある前夜

あい変らず香港には、だるいような空気が流れていた。水面すれすれ迄の、海岸線に沿って高層ビルが立ちならんでいる。それらのビルの隙間のちょっとした空間に、薄汚ない屋台がびっしりとひしめき合っている。鼻をさすような油の臭いがただよう。九竜から香港サイドを目前にする広場にたちながら、佐々木次郎は、ほっとした安堵感にひたっている。

〈あと一五時間……この一五時間は多分大丈夫だろう。〉

佐々木次郎――彼は、日本産業連盟の事務局長である。年齢は五七歳。が、彼の肉体には精気があふれている。

「局長、もうそろそろ引揚げませんか」

「なんだって、香港の夜は今から始まるんだぞ」

警視庁第一外事課きっての腕利き、矢野剛は、不安でしかたなかった。佐々木は、そんな彼の心くばりを無視するかのように海の臭いのただよってくる屋台のスタンドに腰をおろしながら、なんとも

えたいの知れない酒をぐいぐいと飲み干していた。豚の鼻をそいだ油いためが彼の大好物である。香港ポートには、解体寸前のようなジャンクと実にスマートな貨客船が、肩をすり寄せるように浮かんでいる。その海面は、あるところでは薄く、あるところではけばけばしいような光に点滅している。不安な緊張感に巻込まれながらアジア反共懇談会の南郷千人は、佐々木の表情をそれとなく見守っていた。その彼をまた必死になってガードしようとする三人の屈強な若い日本人の青年がいる。香港サイドからは、なげやりな光のデザインが映ってくる。佐々木は、やっとアルコールが体の中に沁み亙ってくるのを感じた。

一九八×年二月八日。その日が、刻々と近づいてくる。

〈二月八日、この日の国際会議をどう切抜けるか。〉

彼は、様々な順列、組合せの戦術を作り出すことに、のめり込むような情熱を沸立たせていた。低い騒音がこの広場に人恋しいように渦巻いている。

「局長、もうそろそろホテルに帰りませんか。まだお酒が飲みたいなら、どこかのクラブに行ったらどうですか」

南郷は、にじみ出るような汗をハンカチで拭きながらそう言わざるを得なかった。香港の夜は、相変らずむし暑い。

女たち

第一インターナショナル・ホテルの地下のバーで、佐々木は依然としてグラスを放さなかった。眼

の前を全身ヌードのバニー・ガール達が、深海魚のように泳いでいる。このバーを佐々木は、もう何年も前から気に入って利用している。

「ミスター・ササキ、何故そんなに思い悩んでいるのよ」

古顔のバニー・ガール、林応美がいった。年輪の回転が彼女の場合ストップしているのだろう。しっとりとした脂肪が、体全体を覆っている。が、広東出身らしい体型――八頭身というよりも九頭身的なスタイル、スリムな体の曲線は、妖精のような美しさを漂わせている。

「ねえ、ミスター・ササキ。ネーザン・ロードのロンドン・シアター（劇場）の裏のなんだっけ、あの酒場に行きましょうよ。ワタシすぐマスターにいって休みをとってくるわよ。だからね、三〇〇ドル（ホンコン・ドル）だしてくれない」

「うん、それもいいなあ。例の酒場ってのはバンブーのことだろう」

彼は、バンブーのママ、アルメニア出身の彼女の浅黒くひきしまった体を思い浮かべた。そういえば、この数年間のうちに、なん度となく彼女と夜をともにしているのである。彼女のセックスはタフであった。それはきっと故郷、アルメニアの荒あらしさを背景にしているのだろう。ロシア革命からフルシチョフ時代にかけて、〝赤い商人〟として活躍していたコミュニスト・リーダーのひとりにミコヤンという男がいた。このバンブーのママの体にもこのミコヤンのようなふてぶてしさが流れているように佐々木には思えてならなかった。彼女の体液からは、狼のようなにおいがただよってくる。佐々木は、それを迎えうつことに一種独特な快感を覚えていた。

〈アルメニア人のこの骨太い生き方は、どこからきているのだろうか。革命と反革命の繰返しの中で、

徹底的に自分を守ろうとする強靱な生活神経が鍛え上げ抜かれたのだろう。アルメニア人――彼らはいまソ連の中で赤い商人・ミコヤンに代表されるように計画経済機能の中枢に、参加している。革命を嫌って海外に逃亡したアルメニア人達でさえ、華僑や印僑よりもすごいエコノミック・アニマル的ビジネスに従事し、成功しているのだ。このバンブーのママ――、ナフストカヤは、いつ香港にきて、いったいどんなチャンスをつかんでこのバンブーという酒場を開いたのか。それはわからない。〉

明日の国際会議を控えて、佐々木の神経は、妙に高ぶっていた。一向に、静まりそうにはない。

「よし、バンブーに行こう。南郷さん、このミス林に五〇〇ドル位やっておいてくれよ」

「局長、もうアルコールはそれ位でいいでしょう」

「何だって、まだ一一時じゃないか。香港の夜は今から始まるんだぜ。ねぇ、ミス林、そうだろう」

林は、微笑みながら頷いた。が、南郷や矢野は、苦々しい表情を浮かべている。南郷――六二歳。老いはまだ訪れてはいない。中野学校出身に特有な何かが体臭として伝わってくる。極東アジアから東南アジア全体をカバーするアジア反共懇談会の理事長を務めるだけの怪しげな貫禄が身についている。矢野――三二歳。T大卒の俊才。しかし彼には、青白いインテリの面影はない。T大レスリング・クラブのマネージャーをしていたらしい。彼の場合、マネージャー兼ファイターだったという。

ネーザン・ロードの夜は、終ることを知らない。港に近い屋台マーケットには、人びとの渦巻がたちこめている。張東新は、その雑踏の中から体を現わした。四〇歳前後だろう。筋骨が全てという彼の体からは、暗いジャガーのような感じが溢れ出ている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.